『囚人番号七十号坑夫』

執念で今年2冊目の出版

武松輝男さん

本所）は、今年四月『坑内馬と馬夫と女坑夫』を出版して好評を得ましたが、このほど『囚徒番号七十号坑夫』を出版されました。

この本は、「囚人番号七十号坑夫」、「囚徒木橋」、「女坑夫」、「苦役」、「弥陀初会」、「時差のない過去」の六章からなり、その一部は機関紙『みいけ』にも連載されましたが、全面的に書き改め小説風にまとめたものです。

前作と同じように、埋もれた地底の記録を、その執念で、資料の蒐集、証言集めに当たりようやく出版にこぎつけました。

三池炭鉱における囚人労働は、明治六年三潴県（のちに福岡県に合併）が派遣した五十人が、はじめは坑外での石炭運搬の苦役からスタートし、のちに坑内労働へとかりたてられ、官営三池炭鉱から三井が経営する三池炭鉱へと引き継がれ、昭和五年にその幕を閉じるまで五十七年間のあいだつづけられました。

囚人労働についての歴史がしだいに明らかになるに従って、その残酷さがあらためて人びとの間で語られ、遺跡の保存、資料の発見などに努力が重ねられてきました。

このようなときに、聞き書き証言ともいうべき本が出たことは大きな意味を持っています。『囚徒番号七十号坑夫』は、東京・創思社刊で二百三十頁、千八百円です。編集部で扱っています。

「囚徒坑夫が、蚤虫で造った煙草袋を陰嚢の裏側に吊るして持ち込んだという話を聞いたとき、正直いって信用する気にならなかった。また、落盤にあった坑夫の足を鋸で切断する話も聞いた。『まさか』と思ったが、いくらなんでも非道すぎると思った」（『囚徒番号七十号坑夫』あとがきから）

著者の武松輝男さん（十六分会・

期末手当満額めざし
ゲートボール大会

諏訪・川尻地域分会

十一月二十一日の日曜日、諏訪・川尻地域分会では、期末手当五十万円を闘いとるための団結ゲートボール大会が行われました。

執行部から芳川組織部長が情勢報告をかねたあいさつがあり、ただちに試合開始。参加は五チームで、結果は優勝三川A、以下三川B、港務A、港務B、小川開の順でした。

試合が終って表彰式があり、つづいて団結集会に移り、期末手当をめぐって論議に花が咲き、たたかいへの意気込みが盛んでした。

新港グラウンドが火力発電の資材置場になっているため、新港社宅の代替えグラウンドにおよそ30人が集まり、期末手当50万円を獲得するための意志統一を行なった。

亮治くんが銅賞獲得

桃島敬三さん（十一分会・三川）の二男亮治くん（三川保育園・五歳）は、このほど大牟田市立延命公園主催の第二十七回動物画コンクールで銅賞を受賞されました。

新年特集号の原稿を募集

組合員・家族、退職者、守る会の会員、新労組員の皆さん、「みいけ」の『新年特集号』で、平和と民主主義、命と権利を守り、生活の向上のための創造をめざしてたたかう労働者の意欲を燃えあがらせましょう。ふるって原稿を寄せてください。

▼原稿募集要領

▽…短編創作・随筆・職場や家庭からのレポートなど　千六百字以内、一人一篇。

▽…私の主張・私の新年・私の十大ニュースなど　千二百字以内、一人一篇。

▽…詩・短歌・俳句・川柳・狂句など　詩は一人一篇。短歌五首。その他は五句まで。

▽…写真・絵・マンガなど　一人一点。白黒で葉書の二倍型まで。

▽…その他、コント・笑話・子供の作文・姿見など　千字以内、一人一篇。

▽…締切り　十二月八日

紙上匿名は自由ですが、住所と氏名は明記のこと。謝礼は特にありませんが、心ばかりの記念品を贈ります。

囚人労働遺跡を訪ねる ⑥

三池監獄合葬之碑

小崎文人

竜湖瀬町の順照寺の境内の右隅に、合葬之碑が立っています。石造りで、背面に「福岡県元三池監獄在監人死亡者。明治二十五年五月建」、と刻まれている文字が心を痛めます。明らかに、囚人墓地といわれるものの一つです。

述べるまでもなく、三池炭鉱のつらい、坑内採炭などの強制労働に駆り立てられてきた福岡県の囚人のうち、まぎれもなく非業の死を遂げていった人びとを合葬した墓です。もともと近くの民家の軒先に立っていたものを、囚人墓地保存会の働きかけが実り、福岡刑務所によりここに移葬されました。昭和四十八年四月二十六日のことです。

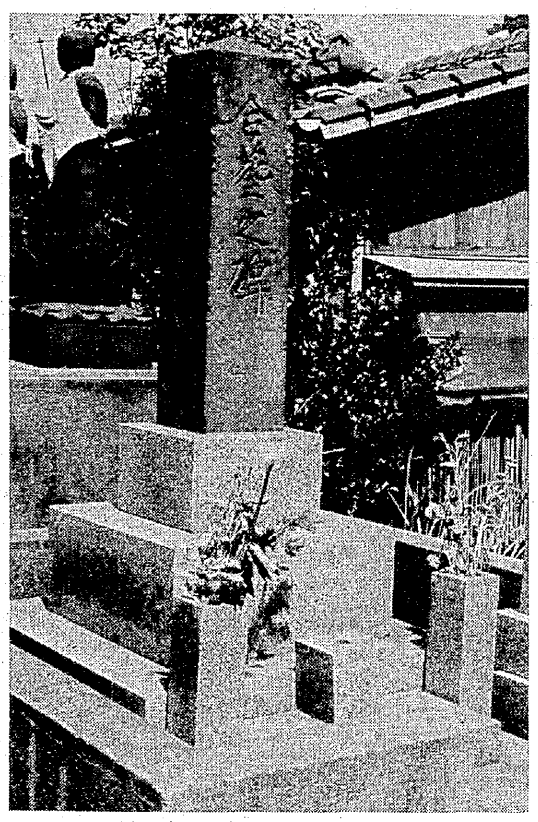
福岡県三池監獄は、その囚人を三池炭鉱の強制労働に駆り立てた明治八年頃は、福岡県監獄三池懲役場と呼ばれたのが、明治十年に福岡監獄三池支署と変わり、さらに翌十九年に福岡県三池監獄とその名を変えたのです。

駆り立てられてきた福岡県三池監獄の囚人は、多いときは五百人近くにのぼり、竜湖瀬（先に投入されていた三潴県監獄の囚人労働者といっしょだった）、長谷、大浦の各坑の坑内採炭などの苦役に出役した。そのため同監獄は「三池郡平野村字敵田に囚人坑夫檻舎」を建設、駆り立ててきた囚人たちを収容したといいます。

知られるとおり、三池炭鉱の石炭生産のために駆り立てられてきたのは、三潴県（最初で明治六年。すぐ福岡県に合併）から始まって福岡、熊本、長崎、佐賀の各県、さらに三池集治監の順でしたが、その死亡者はいずれもはっきりしていません。そのうち福岡県囚人の場合で見ますと、死亡が明らかになっているのはわずか百九十体に過ぎず、多くはかすんでしまっています。明治二十一年十二月十三日の福岡日日新聞の記事は、囚人労働の苛酷さについて述べています。

「監獄の構造甚だ悪く、空気の流通宜しからず、食物も粗悪なり。身体疲労を極め、殆んど人色なし。去る十八年中に百人中四人八分、十九年中には百人中四人四分の死亡者あり。他にある囚人はただ三池に遣るとさえ恐怖の念を起こすと聞けり」

合葬の碑は、何を語ってくれるでしょう。



竜湖瀬町の順照寺の境内に立つ福岡県元三池監獄合葬之碑です。でも、死亡囚数ははっきりしていず、哀れでなりません。

釣りキチ余談　連載第十六回

ボラ掛け釣り（三）

十一分会（三川）　石田鈍竿

その年の冬はかなり冷え込み、例年にくらべ雪の多い冬だった。

昨日の昼過ぎから、どんよりと曇ってきた空は、朝になってひどく冷え込み、雪の降りそうな天候になっていた。

『行ってくるばい。〇〇時頃押し車ば押して来とかんの……』

念を押して出発。釣り場には、もう四人が釣り座取りをしていた。

『ヨオー』とあいさつし、知人が空けてくれた場所に割り込んだ。

釣り座のうしろには、ぶり上げた魚を取りに行くのが面倒くさくなって放置された奴が、あたり一面に白い腹を見せて転がっている。

『潮も五分引きばい。欲せずこのくらいで止むるか』

魚でいっぱいになった押し車を転がしながら、困ったなあ、この魚をどげん処理しようかと考えた。

酒の肴に一匹残し、家から少し離れた魚屋に持って行った。店内に出されているボラの値札を見ると、百匁百二十五円としてある。正月前で高値だ。

『ボラの売れよるごたるのォ安くしとくけん買わんかん、損はさせんばい』

オヤジが、ニコッとして振り返り、『そらよかった、足らでな困っとっとたい。百匁二十円ならもらうばい。全部もらうたい』ときた。

『馬鹿ばいわんな。百二十五円で売るとなら泥棒と変わらんじゃっかん、もう一声ッ』

『もうよか、あんたにはうち合ってはおられん。いつ釣ったかわからん魚ば、もう一声てあるかん。腐っとるかも知れんめが……』

腐っとるといわれて、カーッときた。

ふと棚を見ると、あまり新鮮とは思えない三十センチ足らずの二年セイゴが数匹置いてあり、スズキと書いてある。

お客さんがたて込んできた。ヨーシ見ておれ、と意気込んだ俺は、セイゴを指さして大声で叫んだ。

『これはセイゴやっか、スズキとは七百匁以上ば言うとばい。それにしたっちゃこん魚は古か、ブヨブヨやっか……』

突然のことに、魚屋のオヤジがポカーンと口をあけたまま、目をパチクリさせている。

カッカしながら玉泉寿司屋の前を通ると、そこの主人に呼び止められた。

『あんたに会うてよかった。五、六百匁ぐらいのが釣れたら持ってきてくれんの、匁の六十円でどげんじゃろか』

『俺は商売じゃなかけん、気持だけでよか』といって二匹を手渡した。

『せっかくの魚ば捨てることはなか。市場に持って行かんの』

彼に教えられ、それから市場行きとなった。その日によって値の違いはあるが、百匁四十円を切ることはなかった。

元日を入れて四日間の魚の処置に、あんなに困ったことも、副収入になったのも、後にも先にも一回きりだった。